

カルテット

ムラムリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

4匹のオドリドリによるダンス公演

開演10:00

入場料7\$

矢 · 包子 牙

目次

矢	·	包子	牙
26	16	8	1

牙

水のようにたゆたう動き。腰を振り、腕をゆらゆらとなびかせて。

舞台の上で、私だけ。後ろには、三匹の同じ囚われ者がいる。

踊らされる事なんてちつとも楽しくなかった。こうして囚われないで、自由きままに踊っていた頃はなんて楽しかったこと。

ニンゲンの観客達が、私の踊りを色んな目で見て来る。

興味のある目から、退屈そうな目まで様々。

そんな沢山の目に対して、私は馬鹿にする目で見返したかった。嫌々踊っている私達を興味のある目で見られるのも、退屈そうな目でただ見ているのも、どれもこれもが私にとって馬鹿らしかった。

でも、それがばれるともつと馬鹿らしい事になるから、やらない。

私の踊りが終わると、次は黄色の番だった。

パチツ、パチツと静電気の音を鳴り響かせて、表面上だけは元気一杯な素振りをしてピッピッピッ歌いながら踊り出す。

馬鹿らしい。

けど、やらなきや生きられない。

今日は赤色の調子が悪く、何度か転んだ。いつの間にか足を痛めていたみたいだった。

ぱち、ぱち、といつも通りのちらほらとした拍手の後に、私達は舞台の上から退場する。

舞台から観客の目の届かない所に来た瞬間から、赤色がびくびくと怯えだした。

このまま主人の元へ戻りたくない様子だったけれど、このままここに居ても私達も巻き添えになるだけだから、押ししていく。

ピイピイと恐怖に震えて鳴いていた。足を痛めたあんたが悪いんだ。

暫く歩いて、観客の声も聞こえなくなってくる頃、暗闇の中で赤く光る目が八つ、見えた。

ぞく、と体が震える。

ぼた、ぼた、と涎が垂れる音、それをじゅると吸う音。唸る声。

明かりがついて、目の前のルガルガン四匹の姿が露わになる。頭と胴のとても硬そうな岩と、血のように赤い毛皮と凶悪そうな赤い目。一様に自分達の事を美味しそうな獲物と見る目。

何度見ても慣れない。主人に従ってさえいれば、踊りさえちやんとやっついていれば何も

して来ないと分かっている。

程なくして主人がやって来た。

太り気味の、つやつやしたニンゲンだ。とても酷いニンゲンだ。

私達を捕えて、ここで無理矢理躍らせる、とても酷いニンゲンだ。

そのニンゲンが、ぽつ、と言う。

「ルガ。赤が悪さをした」

一匹のルガルガンの腕が振り上げられた。赤色は体を縮こまらせた。

鈍い音。強く叩きつけられた腕の下で、赤色は血を吐いた。

「三度、だ。転んだ分だけ、な」

その言葉が、びく、と赤色を震えさせた。疝高い鳴き声を鬱陶しそうに眺めるニンゲンの元で、ルガルガンに命令が下された。

爛々とした目で、ルガルガンがまた、腕を振り上げた。

足を引き摺るように赤色はふらふらと歩いていた。

三度、ルガルガンに強烈に叩かれた体は、とても汚い。

「さつさと歩け」

どうしても遅れてしまうのを、必死に痛みを堪えながら歩いていく。

いつもの頑丈な小屋に着いて、最後に赤色が倒れ込むように入った所でドアが閉めら

れ、鍵を掛けられる。

中にはそう大した量でもない飯がいつものように置いてあった。変わらない日常。

外からは、海辺で人間やポケモン達のはしゃぐ音が聞こえる。忌々しくて仕方がない。

飯を食べ終えた後に出来る事は、寝る位しかない。

次の日。

扉を開けられ、ルガルガン四匹が目の前に居る中、飯を置かれた。

赤色は足が更に悪化しているみたいで、ずりずりと痛んだ足を引き摺りながら歩いて来た。

主人がそれを見て、赤色をルガルガンに捕えさせる。

両足を持たれて、逆さになったままどこかへ連れて行かれていく。必死に泣き叫んでいると、主人がそのルガルガンに命令をした。

赤色が岩に叩きつけられる。

あ、今、逃げられる？ 私は思った。

主人はその泣き叫ぶ赤色に集中しているし、目の前にはいつも四匹居るルガルガンが一匹抜けて、三匹しか居ない。

ふらり、ふらりと私は踊った。私を見た全てが、正気を保てなくなる踊り。

とても久しぶりに、私は本気で踊った。命を賭けて、私自身のこれまで踊って来た歴史を賭けて、私は踊った。

ほんの短い時間だったけれど、踊り終わるとルガルガン達の目があらぬ方向を見た。紫色も黄色も含めて皆の足取りが覚束なくなる。全員混乱した。

今だ！ 今しかない！

私は翼を広げて飛び出した。

広い、広い青空に。とても眩しい太陽に向かって、心地良い自由に向かって。

とても気持ち良い。とても気持ちが良い！ 空を飛ぶ事がこんなにも気持ち良い事だったなんて、どうして忘れていたんだろう！

一度、二度、羽ばたく。高く、高く！

……あれ？ あれ？ ……落ちてる。

そう思った時、私の目の前には、巨大な岩が迫っていた。

何故、何故という思いがぐるぐると巡る。

片方の翼が折れている事にやっと気付いた。もう、体も動かなかった。飛んで来た大岩は、私の体を壊してしまった。

真つ逆さまに落ちながら、涎を垂らして走って来るルガルガンの一体が見えた。混乱

してなかった。

混乱が解けるのが早過ぎる。

どうして？　なんで？

私は死ぬの？　どうしてこんな事にならなきゃいけないの？

私は何かしたの？

嫌だ、嫌だ。

どさり。私が落ちた音。体はどうしてか、もう全く痛まない。

いやだ、いやだ。

ルガルガンがやってきた。

乱雑に掴まれ、口元に持っていかれる。

微かに声が出たけれど、ルガルガンは聞いちやいなかった。私の体が私のものじやな

いみたい。

ルガルガンの大きな口が開く。

食べないで。死にたくない。動かない。

大きな牙が私の腹に食い込んだ。ぶちぶちと音がする。血がたつぷりと出た。どう

して痛くない、でも。

みちい、みちい、ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、ごきゆう。

とても美味しそうな顔
がふう。ばきやつ。

包丁

そののけしき。あおいそら。しろいくも。あかいりゆうがひとをのせて、とんでい
る。きもちよさそう。

ぎざーん、ぎざーん、うみのおとがする。みんな、たのしんでる。

ぼく、ぼく。ぼくは。

あたまがいたい。

とつても、いたい。なんだか、くらくらしする。

がたん、がたん。くるまがゆれた。ゆれると、あたまがいたい。ずきんずきん、なん
か、ぼく、こわれちやつたみたい。

あしもいたい。はねもおれてる。

あれ、あれ、うごけない。

どうして。うごかない。そののけしきがみえてるだけ。

くびもうごかない。どうして。

「……ええ、はい。5ドルですか。……いえ、いいですよ、それで」

こわいひとが、ぼくにひどいことをしたひとが、とんとんと、おとをたてている。

こわいよ。どうしてこんなことするの。
ぼくは、ぼくは。

くるまがゆれて、あたまがいたい。とてもいたい。ずきんずきん、あしも、からだも、
やつぱりうごかない。

こえもでなかつた。いたいのに。
いたいよ、たすけて。

あかいいぬがとなりですわっていた。

そとをながめてた。いつもみたいに、ぼくをおいしそうなめではみてなかつた。
おとなしかつた。

たすけて。ぼく、いたいよ。だれか。

たてものがながれていく。くもがながれていく。ひとがながれていく。まどのそと
で、みんなしあわせ。

みんな、ぼくいがい、しあわせ。

「つたく、また捕獲しに行かなきゃしやあねえじやねえか」

ほかく。ほかく。いやなことば。あたまがいたい。

「二匹5ドル。一匹5ドル。十匹捕まえたら50ドル。百匹捕まえたら500ドル。
そつちもあんまりいい稼ぎじやねえな」

いやだ。はなばたけにかえして。あかいはなばたけ。ぼくのかきよう。おとうさん。
おかあさん。

まいにちたのしい、ぼくのかきよう。

まいにち、たのしかった。

おとうさん。

おかあさん。

おにいちゃん、おねえちゃん。

ぼく、ぼく。

「一日数回仕立てて躍らせるだけでそれ以上だしな」

ぼく、がんばったのに。

がんばってたのに。

あしがいたかっただけなのに。

ぼく、ぼく。

「あー、ガルルも美味しそうに食べちゃってさ。後の二匹も今日は使いもんになんねえ。

あいつ今日飯抜きだな」

「ウォーン！」

「駄目ってか。まあ、そうだよな。俺が指示したもんな。」

でもさ、あんな、鳥の目の前で美味そうに食う奴があるかよ」

「クウン」

ぼく、ぼく。

しにたくないよ。どうしてあたまがいたいもの。どうしてからだがうごかないの。どうしてぼくは、こんなことになってるの。

おとうさん、おかあさん。

「なあ、ルガ。お前やつぱり車は苦手か？」

「ウウ」

「そうか。慣れないもんだな」

くるまが、とまった。あたまが、いたい。ずきんずきん、いたむ。とつても。

「ルガ。持つてけ」

うごかさないで。いたくしないで。

いたいよ。あしをつかまないで。

ぼくをもたないで。

いたいよ。あしがいたいよ。あたまがいたいよ。うごけないよ。

おにいちゃん、おねえちゃん。おとおさん、おかあさん。

たすけてよ。たすけてよ。

ぼく、しにたくないよ。

「そんなに状態も良くないですね」

「ええ、ガソリン代位にはしてくれよ」

「……4ドル50セント」

「……分かった」

「いたいよ、いたいよ。はやくぼくをたすけて。」

「おとうさん、おかあさん。」

「にんげんのめがいきなりぼくのめのまえにきた。」

「こわいよ。なんでそんなめでぼくをみるの。」

「なんでぼくをたあすけてくれないの。」

「たすけてよ。いたいよ。たすけてよ。いたいよ。」

「おとうさん、おかあさん。」

「たてもののなか。おいしいにおいがする。」

「じゅわじゅわ、ばちばち、とんとん、ばきばき。」

「いろんなおともした。ひとのこえも。」

「あたまがいたい。あれをたべさせてくれるの？」

「ぼくをあれでげんきにしてくれる」

の？

とびらがあいた。

ちのにおいがした。とてもつよい、ちのにおい。

え、ぼくは。ぼくは。

いやだいやだ。いやだいやだ！

たすけてたすけて、おとうさんおとうさんおかあさんおかあさん、おねえちゃんおねえちゃんおにいちゃんおにいちゃん。

いやだいやだよ、しにたくないしにたくない。

たすけてだれか。きいろ、もも、むらさき。どうしてここにいないの。どうしてぼくはこんなところに。ぼくは、ぼくは、どうして。

いやだよしにたくないよ。しにたくないよ。いやだよ。

いやだいやだ。

いやだいやだ。

「あんまり質良くないが出して大丈夫だろ？」

ひっ。

かおをちかづけしないで。

こわいよ。おとうさんおとうさん。たすけて。やめてよ。やめてよ。

そんなめでぼくをみないで。そんなめでぼくをみないで。

「……うん、大丈夫だろ。なあ、ラッタ？」

「ヂュウツ！」

「大丈夫だつてさ」

やつとよこになった。すこしだけ、らくになった。

でも、でも、せなかがぬるぬるしてる。とてもこい、ちのにおい。

ぼくのせなかに、たくさんのちが。

たくさんの、とてもつよい、ここでたくさんしんでいる。しんでいる。

しにたくない。しにたくない。いやだ、おとうさん、おかあさん。

おとうさん、おかあさん。おねえちゃん、おにいちゃん。

ぼくをたすけて。たすけて。たすけてよ。

うごかないんだ、ぼくのからだ。

うごかないんだよ、ぼくのからだ。

ぼくは、ここからにげられないんだ。ぼくは、このままだとしんじやうんだ。

だから、だから。たすけて。たすけて。たすけて。たすけて。

「じゃあ、さつさと捌きますか」

こわいよ。

えっ、なにそれ。なにそれ。

あのあかいいぬのより、とてもするどい、つめ。

ひかつてる。つるつるで、するどい、とてもおおきい、つめ。

いやだ。おとうさん。おとうさんおとうさんおとうさんおかあさんおとうさんおに
いちゃんおねえちゃん、きいろももむらさきたすけてたすけてたすけてたすけて！

いやだいやだいやだいやだ
だんっ。

「こちら、炎のチキンステーキになります」

耳に悲痛な声が入って来る。助けてと叫んでる。生きていたいと叫んでる。死にたくない、と叫んでいる。

私は、悪くない。

だって、私のパチパチが赤に当たっちゃっただけだもの。

私は何もしていない。私は悪くない。

赤が、岩に叩きつけられた。

ペキやつ。

嫌な音がした。赤は、動かなくなつた。

私は、私は、悪くなんかかない。私が悪い訳ない。

桃がその瞬間、踊りを始めた。どうしてこんな時に踊るの？ どうして、そんなにい

つも以上に真剣に踊っているの？

けれどすぐにその理由は分かつた。ふらふらと踊っていた。

つられて私の足がふらつき始める。ルガルガン達の足もふらつき始める。

その隙に逃げようと飛び立った桃。

あ、待つて。私も連れて行つて。私も行きたい。

けれど、ふらふらする視界のその隅で、ルガルガン達が隠し持つていた木の實を食べたのが見えた。

「ガルル！ 仕留めろ！」

木の實を食べた瞬間に、ルガルガン達の混乱は解けていた。きれいさっぱり。

じゅるり、と涎を吸う音。やつと、食べられると言った、喜びに満ちた音。

ガルルと呼ばれたルガルガンは、頭突きで近くの岩を砕いて手に握る。それを桃に向つて思い切り投げつけた。

それは、桃の体に直撃した。

落ちていく桃。体のバランスが壊れたのにも気付かずにまだ空を飛ばうとしている桃。

そこに二つ目、更に大きい岩が投げつけられた。

くるくると落ちていく桃。飛んで行く岩。

まだ何が起きたか理解出来ていないような顔。

体に直撃した岩。

ああ、ああ？ 私が、私が、こんな、こんな??

私のパチパチが赤に当たっちゃったからこんな事になったの？

嘘だと言つてよ。誰か、私は悪くないって。私は。

ルガルガンが涎を垂らしながら走つて行く。全速力で、落ちていく桃に。桃が落ちた。びくともしなかった。

逃げようともしなかった。動けないみたいで。

嫌だ、嫌だ。

ルガルガンが桃を掴んだ。乱雑に、そしてそのまま口に持つて行く。

桃の首が僅かに動いた。私の方を一瞬、向いた気がした。

血が、嘔き出した。

肉を引き千切り、桃の体が一瞬震えて、死んだ。

一心不乱に食べていた。血を撒き散らしながら、肉を引き千切りながら。

ああ、ああ。

私が赤も、桃も殺したの？ 私が悪いの？ 私が、私が。ああ、ああ！

「……ああ、仕留めろつて言つたら、そうだよな、うん」

悪びれもしない、デブの声が聞こえた。

……そうだ、悪いのはあのデブだ。

……でも、でも。私のパチパチが当たっちゃったから。

ああ、もう、でも、いや。

「……押し込んで。俺はこいつを売っぱらいに行く」

赤も、連れて行かれる。もう、戻っては来ない。あのデブの事だ。

デブめ。デブめ。くそ、ちくしょう。

ああ、嫌だ。デブが居なければ私も紫も、赤も、桃も、こんな目に遭ってない。

ルガルガン達がこつちにやって来た。

桃を食べ尽くしたルガルガンも。

血の臭いがした。口周りは桃の血で塗れていた。桃の死んだところには、砕けた骨と血の跡だけが残っていた。

でも、でも、私が。

私が、デブに殺させた。

ああ、ああ。

どうして、私達はこんな目に遭っているのだろう。

私と同じオドリドリが、外を楽しそうに飛んで行くのも見る事があった。

私達と、空を飛んでいるのは、何が違ったんだろう。私達だけが、どうしてこんな所で、こんな目に遭っているんだろう。

どうして、どうして。

この狭い小屋の中。カづくで壊そうとは何度もした。でも出来なかった。うるさく

していると、あのデブがルガルガンを連れてやってきた。殴って動けなくなつた。

ずっと、死ぬまで？　ここでもただひたすらに、生き続けるしかないの？

何の楽しみもなしに。どこにも行けずに。自由に羽ばたく事さえ出来ずに。私は、そうして死ぬまで生きなきゃいけないの？

本当に、どうして、私達だけが。

私達、何かしたの？　生まれてから、私、生きていただけだよ。生きる為に殺したりもしたけれど。

でも、みんなしてるよ。海で遊んでる誰もが。空を飛んでいる誰もが。

じゃあ、なんで？

なんで、私達はこんな目に遭っているの？　どうして私達だけが閉じ込められて空を飛ぶ事すら出来ないの？

生まれてから、ここに閉じ込められるまでの記憶をどんなに思い出しても、なんか分からなかった。

どんなに、何度も何度も思い出しても。

その次の日には、新しい赤と桃が連れて来られた。何にも知らない顔。ただただ、捕まえられて困惑してるだけの顔。

脳裏に甦る。

叩きつけられる赤。食べられた桃。食べられる直前に私を見た桃。

もう、いやだ。もう……いやだ。踊りたくない。

こんなところ、もう、もういやだ。でもどうしたらいいのか、私、分からない。殴られたくない。叩きつけられたくない。食べられたくない。踊りたくない。死にたくない。

ここから出たいだけなのに、それがどうしても、どうしたらいいのか分からない。でも、外に出て、今日も踊らなきゃいけない。そうじゃないと、生きられない。

踊りたくないけど、そうしないと死んじゃう。殴られちゃう。食べられちゃう。叩きつけられちゃう。

ああ。

味気ないご飯。食べないと、お腹が減る。楽しい事なんてこれっぽっちもない。楽しい事なんて、これっぽっちもない。嫌な事はたくさんある。

私は、私達は、嫌な事ばかりの中を、それから逃げる為だけに生きてる。楽しい事なんてない。

嫌な事ばかり。

ああ。

リハーサル。ルガルガン達に脅されながら、一連の流れを叩きこまれる。

入場、それぞれ踊って、退場。ただそれだけの流れ。

失敗すれば殴られる。踊りが上手く行かなくても殴られる。使い物にならなくなったら捨てられる。

そんな流れ。風に乗れなきや落とされる。海の上落ちたら待っているのは大きな口を開けて待つている鯨達。

食べられたらもう、残るのは血の痕だけ。その血もすぐに消えてしまう。

今日も踊らなきやいけないときがやってきた。

紫が踊る。周りには体をぞわぞわとさせるような光を纏って。ふらふらと、ゆらゆらと。妖しく。

いつも通りのように踊っていた。赤が連れて行かれたのも、桃が死んだのも全く堪えてないように。

そう言えば、紫は死者の魂を操れるってデブが言っていたような気がする。

……紫は、死者の声が聞こえるんだらうか。紫は、赤と桃が何を思っていたのか分かるんだらうか。

私を恨んではいないだらうか。私のパチパチが当たらなければ、赤も桃も死んでいなかったのに。

デブを恨まずに私を恨んでるなんてことあるなんて、いや、ない。

でも、そうだなんで、言いきれない。

ああ、怖いよ。怖いよ。私の事恨んでない？

私は、私は。

紫の踊りが終わった。

とととと、と足を小刻みに滑らせながら戻つて来る。

ちらり、と私の方を見て来た。こつそり見るように。

え、何それ。赤と桃が何か私に言つてたの？ 許さない？ お前のせいだ？

よくも殺してくれたな？ お前も死ねよ？

ああ、ああつ。

でも、次は、私の番だった。踊らないと殴られる。踊らないと生きられない。踊らないと、踊らないと。

ピーーツつと、私は無理矢理鳴いた。

ピツピツピツピ、私は元気に鳴く。これからも、ずっと。

あはははは。

あつはつはつは！ 楽しいよ！ 踊ることつてこんなに楽しかったんだ！

腕も足も振り回して！ ピツピツピツピバカみたいに胸からはち切れるばかりに歌つ

て！

ピッピピッピ！ ピッポパッポピッポパッポ！ ピピピピッピピピピピピピ！

たのしいたのしい踊りだよ！ みんな私をみてる！ みんな私のことが好きなんだ！
びっぴっぴっぴびびびびっ！ ほほっほほっほほほほっほ！

たのしいびっぴ！ たのしいびっぴ！ ポポポッポポほほっほっほ！

みんな、みんな、わたしのおどりが大好きなんだ！ わたしって愛されてる！

楽しいことはここにあったんだ！ どうしてわたし、こんな事にも気付かなかったんだらう！ ほっほほほっほピポほっほっほ！

ばちつとほら、そのきみ！ 元気ないよ！ わたしの元気の源、びりびりを分けてあげるからさ！ たっぶりたっぶり！

びっぴびほっほほびびっほ！

びっほほほっほほほほっほ！

とんとん足を動かして！ ほらほらみんな、元気になろう？

ばっちばっち電気、たくさん分けてあげるから！ まだまだたくさんあるよ！ ほらほらくるくるまわって！

みんな元気になってきたじゃない！ みんな立って走って踊りまわろう！ ほらほらもつと！ くるくるぐるぐるぐるぐる！ ほっほほびっほほほほっほ！

おお、君、元気になったじゃない！ そんなに激しく動いちゃって！

やめてくれ？ いやだよまだまだやるよ！ もっと元気になって貰わなきゃ、私、殴られちゃうもの！

私、楽しいことが大好きなの！ 君もそうでしょ？ そうだよね？ 青い海で泳いで、ゆつくり笑いながら彼女と歩いたりするんでしょ？

その海カモメくんも！ そんなにびくびく動いちゃって！ 感極まったっていう感じかな？

うれしいよ！ そんなに私の踊りが好きなんだね？ びっぴぽっぽ、ぱぽぽっぽ！ あっはっはっはっは！ たのしいたのしいわたしの踊り！

みんな……あれ？ いない。

あれ……。わたし。

なんだか、ねむい。

つかれた。

矢

ルガルガン達が怯えていた。主人は啞然としていた。

狂ったように踊っていた。壊れたように歌っていた。

いや、もう、壊れていた。狂い果てていた。赤と桃が死んでからずっとおかしかったけれど、何でここまでなったのか、俺には分からない。

俺には、分からない。

「ピーツピツピツピ！　　ピーツピツピツピ！　　ピピピツ！　　パポポツポ！
ピーツピツピツピツピ！」

それは、見た者を元気にさせる踊りなんかじゃなかった。

見れば見る程、その見る者の内側から入り込んでどろどろと、ぐずぐずと腐らせていくような踊りだった。

そんな踊りだったのに、目を離さずには居られない。

主人が遠くで止める、とルガルガン達に命令した。でも、ルガルガン達はその命令に従わなかった。

主人も二度、同じ命令を飛ばす事も無かった。

「ピッピピビビイーーーーーッ!! ビイボバボボブツツ」

段々と速くなっていく、壊れたリズム。腕と足がバラバラなリズムを刻んでいる。その口から出る言葉はまるで呪詛のように幸せを願っている。

一方的な、独善的な幸せだ。恨みが、妬みが、裏返って、どろどろな幸せを願っている。

その踊りから電気が染み出してきた。ぱちぱち、バチバチ、と。

オドリドリには普通出せないような強烈な電気だった。

「バツブツヂツボ、ギャツ、ヂュツ、ペンピツ、ブチツ」

その電気は弾けて舞台の床を黒く焦がした。舞台のカーテンに弾けて燃え始めた。

最前列の人間に当たって倒れさせた。隣のキャモメが助けようとして、逆に更に激しい電撃を食らった。

カーテンがすぐに激しく燃え始める。人が逃げ始める。ずっと続いて来たこの劇場が、たった一匹の狂ったオドリドリによって壊れていく。

誰も、止める事は出来なかった。

ただ、俺は啞然と立っていた。

もう、とつくの昔にここから逃げる事は諦めていた。

何匹もの死を見て来た。脱走しようとして食われていったオドリドリ達を眺めて来

た。

もう、無関心になっていた。

踊ってさえいければ逆にここは平穩だった。外よりも、だ。

どこかへと消えた兄が、蜘蛛に捕えられてか干からびて死んでいた姿で出て来て、意気消沈している時に捕えられた。

従ってさえいければ安全はあるこの場所と、自由だが安全は無い外。

どつちが良いのか、俺には分からなかった。

他の捕えられた他の奴等の大抵はそういう事を学ばない内に連れて来られたようで、逃げたがっていたが。

待っていれば、もしかしたら番も出来て、何にも怯える事なく子を為せるかもしれないとか、そういう事も思っていたのに。

壊れていく。

「ビーツビーツビーツ！ ビーイ、ベツ、ブツ、ヂツ、ヂュツ……」

暫く踊った後、力果てるように黄が倒れた。人を数人、ポケモンも数体死んでいた。

気付けば新しく来た赤も近くで倒れていた。弾ける電撃を食らっていたようで、身体が黒焦げて嫌な臭いを発していた。

同じ、新しく来た桃は、観客の人間やポケモン達といつの間にか逃げていた。

カーテンが黄の上に燃え落ちた。

黄はびくともせず、そのままカーテンと共に焼けて行った。踊り終えた時にもう、死んでいたのかもしれない。

狂った末に、死んでいる事にさえ気付いていないまま。

犠牲となった人間やポケモンから、魂がゆらゆらと出て来ていた。こんな死に方じゃ落ち着き、消えていくまでには時間が掛かるだろう。

そして、黄からも魂が出て来た。

呪いや恨みに満ちていた。ただ、それでも驚く事に、そこらにある似たような魂とその感情の強さは大して変わらなかった。

何故か……。

やはり、もつとひどい事をしている人間だって居るのだろう。

町中を飛んでいる時、肉を食べている人間やポケモンだって沢山居た。毎日毎日。思い出せば、色んな言葉があった。

——アマカジ一匹から少ししか取れない貴重な果汁を煮詰めて——

——ぼくのピカチュウが射貫かれて死んじやった——

——ヤドンのシッポを切り刻んで——

——結束の固い竜達の住処から取って来た子を暗闇の中で育てて——

——何でこの子が死ななきゃいけないの！ どうしてダグトリオはこの地下を掘つて——

——幾千もの卵の末に出来た最高の個体——

——キテルグマの手の平を蜂蜜に漬けて——

——復讐に燃えたガラガラ達によって惨殺された一家の物語をしましょう——

——私の彼氏、ライドポケモンごとどこかへ消えてしまったの——

——アシレーヌの喉がもう使い物にならねえ、捨てるしかないな——

——私のニヤヒート、変なトカゲにメロメロになったまま帰ってこないの——

——とても珍しい色違い達の祭典をやる為に、とにかく子を産ませた——

——いう事の聞かないポケモンを、餌にしてやった——

そんな外は、ここより幸せなのか、俺には分からなかった。

安全という意味では、従ってれば良かった。踊りも毎日疲れ果てるほどやらなくて良い。

どちらが良いか、分からない内に、俺は、強制的に外の自由に出される。

建物が崩れ落ちる前に、外に出た。火を消す為に人間達やポケモン達が集まって来ている。

空を飛んで、逃げた。

でも、逃げたと言えるのか、分からない。
分からない。

逃げた先は、今より幸せなのか。

干からびて死んだ兄の表情は、苦悶に満ちていた。

どこで寝れば良いのかすら俺は忘れかけていた。

どういう場所が安全なのか。

あの頑丈な小屋は安全過ぎた。物音が立とうとも、別に起きる必要が無かった。同じオドリドリ以外がこの小屋に入って来る事は無かった。

外に出れないが、逆に外から命を脅かす何かが来る事なんてなかった。

毎日、同じ事をしていれば生きていられた。

退屈と言えば退屈だが、俺にとってはどこに潜んでるか分からない死から逃げられるなら十分マシだった。

まあ、生まれ故郷に帰る事にするか、と決めた。

人間の暮らしに溶け込んで生きるのは怖すぎる。そういう事が出来るのは、自らが糧になつてしまわないような強さや知恵が必要だ。

俺にはどつちも無い。

花園に帰る以外、そもそも他に当ても無かった。

風にゆらゆら揺れる紫色、澄んだ香りの満たされた花園。

兄が死んだ場所でもあったが、懐かしくも思った。

同じ仲間も居る。

でも、懐かしく思いながら、その花園がどこにあるのかも分からなかった。

ここに連れて来られるまで、寝かされていた。方角も分からない。

……………。

朝が来た。腹が減った。飯も勝手に出て来ない。

全く勝手の知らない土地で、ちよつと開けた場所に全く知らない木の実が色々生えて
いる。

周りに誰も居なくなつてから、そこに近付いた。

匂いからして食えるものだったが、合わない味だったり、妙に酸っぱかったり。

……ああ。

帰れる気がしなかった。

海も、空も、俺にとってには広過ぎる。

狭い所で暮らしたかった。紫の花園が、あの舞台が、俺にとって丁度良い場所だった。
色々試しに啄んで、やっと好みの木の実を見つけ引つ張り出す。

中から蟹が唐突に出て来た。

青い拳が真直ぐ、自分に飛んで来た。

相性からか全く痛くなかったものの、驚いて転んでしまった。

体も完全に鈍っていた。立ち上がるのにも、体が強張ってすぐに出来なかった。それからどうすれば良いのかも、分からない。体が滑らかに動かない。

どうすれば良い、どうすれば良い？ 俺の持っている攻撃手段は何だった？ こいつに通じる攻撃なのか？

蟹は拳が通じないと見るや、泡を吐き出してきた。

空に飛んでやり過ぎし、そのまま逃げてしまおうかと思った。

いや……ここで逃げてはもう、俺は生きられない。逃げてばかりじゃ、生きられない。腹もまだ全く満たされてない。

こんな、絶望のまま死を迎えたくない。

紫の花園。仲間の居る花園。そこに俺は、帰りたい。

泥水を啜ろうとも、空腹に苛まれようとも、敵に襲われようとも、帰りたい。

風の刃を生み出し、水の泡を切り裂いた。蟹はその刃を避けて、また大量に泡を吐いて来た。

今度は降りてその泡を躲し、踊った。まず、相手を弱らせる。

ふらふら、ゆらゆら、ぐらりぐらり、リズムも姿勢も崩して。伝播した揺れが蟹を混乱させた。

そして、次にまたゆらゆらと踊る。蟹がふらふらとしていた間に自分の力を整えていく。

木の実を隠し持っている様子も無く、近くにある木の実を食う様子も無い。時間はあつた。

蟹が次第に正気に戻っていく。その時間ですつと使っていなかった自分の力が、完全に形になった。

周りの霊の力を借りて。

蟹が正気に戻って、また泡を吐き出してきた。

込めた力を放つと、それは泡なんて一つ残らず弾けさせて飛んで行く。蟹は躲す間もなくそれを身に受けて、遠くへと吹っ飛んで行った。

……やつた。

自分は、弱くなんかない。

戦える。そうだ。弱者なんかじゃない。

戦い方を覚えよう。死なないように、食べられないように。そして、帰ろう。

帰れるだけの力は、自分に十分にあるんだ。

でも、まずは空腹を満たそう。腹が減って仕方がない。昨日から何も食っていないんだから。

足を前に踏み出す。

全身に激痛が走った。

痛い痛い痛い痛い！

な、なにが？ 新しい敵？

え……周りに、誰も、居ない？

いや、何で攻撃されたんだ？ 俺の体に、傷が無い。

振り返って見つけたのは、一本の鋭い何か。それは俺の影に突き刺さっていた。

何だ、これ、は？

動こうとしても、影が固定されたかのように自由に動けなくなっていた。

取り敢えず、これを抜かなきゃ。

いや、そもそも……どこから飛んで来たんだ？

見回すと、また一本飛んで来ていて思わず身を伏せた。自分のすぐ後ろに刺さった。

伏せていなければ頭を貫かれていた。体がぞくりと震える。激しく強く、震えが止ま

らなくなる。

とても遠く、俺の见えない程の遠くから狙われている。

……逃げなきゃ。敵う訳がない。

死にたくない。嫌だ。矢を抜いて、でも、飛べなかった。

どこから矢が飛んで来るのか、全く分からない。飛んだ瞬間に狙われるような気がした。

何をしようとしても、動いたその瞬間を狙われる気がした。周りを見渡してとにかく

警戒に全集中しなければ次は仕留められる気がした。

一発のその激痛で、俺自身にももう全く余裕がない。

敵う訳がない。実力が違い過ぎる。

……俺は、逃げられないと思ってしまっている。

死にたくない。嫌だ。帰りたい。

紫の、澄んだ香りの花園。

ゆらゆらと風にゆれる、紫の花々。

また、全身に走る激痛。

ああ。

駄目だ。

とても大きな鳥がやってきた。後から人間もやってきた。

「凄いよジュナイパー！ あの距離から仕留めるなんて！」

ジュナイパーと呼ばれた大きな鳥は、人間に頭を撫でられて気持ち良さそうにしていた。

とても幸せそうだった。

「よし、私も頑張っちゃおう！」

うーん。木の実もある事だし、あ、あそこに蟹もいるね。

鳥と蟹のシチューなんてどうだろ？ 美味しいかな？

いや、美味しく作らないとね！」

……ああ。

帰りたかった。

帰りたかった。

帰りたかった。

帰りたかった。

帰りた